



長野県林業総合センター - 塩尻市片丘 5739  
Nagano-prefectural Forestry Research Center

TEL 0263-52-0600

FAX 0263-51-1311

## ならたけ病による森林被害

キ - ワ - ド : ならたけ病、立ち枯れ、集団枯損

県内のヒノキ幼齢林やカラマツ壮齢林でならたけ病による立木枯損が発生した林分がみられたので、この病害の特徴と対策について解説します。

ならたけ病とは

ならたけ病は、「ならたけ」というキノコ(写真-1)が、立木の根から侵入寄生し枯らしてしまう土壌病害で、ヒノキ、カラマツ、アカマツなどの針葉樹、ケヤキ、ナラ類、サクラ類などの多数の広葉樹に被害を与えます。この病害は、植栽2、3年目のヒノキ、カラマツの造林地でしばしば発生しますが、10年以上経過した林分での発生はまれです。また、被害は林分内で点状におこる場合と、集団的におこる場合がみられますが、県内では数haにおよぶ大面積の集団枯損はみられません。

ならたけ病の拡大形式

ならたけ病は、伐根や被害木の根から伸びる黒褐色の針金状あるいは細ひも状の根状菌糸束(ひじきのような菌糸の束)が土壌中を広がり、立木の根などから侵入して拡大していきます。その拡大の速度は、年0.2~1.5m程度といわれています。



写真-1 「ならたけ」の子実体

## 被害木の症状

「ならたけ」に寄生された立木は、葉が徐々にしおれ褐変落葉し立ち枯れ状態になります。また、葉がしおれ始めた立木の地際部の樹皮を剥がすと、キノコ臭がする白色あるいは黄白色の菌糸膜（クリームのような光沢がある薄いマット状の菌糸のかたまり、写真 - 2）が形成されており、立ち枯れた立木では、菌糸膜とともに黒褐色の根状菌糸束も観察されます。



写真 - 2 樹皮下の菌糸膜

## 防除法

ならたけ病は土壤病害であることから、前生樹の伐根や被害木の伐根が繁殖源となります。そのため、防除法として、公園などでは被害木の伐根の除去や土壤への殺菌剤の混和などの方法が用いられています。しかし、これらの方法を林地に適用することは困難であるとともに、「ならたけ」の根状菌糸束は土壤中で7年以上生存することから、現在のところ林地での防除法はありません。

## 対応策

造林地における被害では、植栽後 10 年をすぎるとほとんど発生しなくなるので、被害の終息を待つとともに、感染源となる被害木の掘り取りを行うことがあげられます。また、立木が寒さの害で樹勢が衰弱したり、土壤中の停滞水で根腐れをおこすと、「ならたけ」に寄生されやすくなるため、植栽時には適地適木の原則を守ることが必要です。

カラマツ壮齡林などで被害が発生した場合は、今後も枯損木が発生すると考えられることから、長伐期にせず早めの伐採利用を考える必要があります。また、伐採後の更新も再度同じ樹種を植栽すると再び病気になると考えられるので、「ならたけ」に寄生されないスギの植栽や、下層に侵入してきている広葉樹を育成していくことが考えられます。

担当者 育林部 岡田充弘